作文

群馬県コンクール 金賞

いただきます

渋川市立古巻中学校　3年　安　原　　千　遥

夜の七時三十分。それは、私が一番楽しみにしている夕食の時間だ。私の家では一日の中で唯一夕食の時間だけが家族全員が集まる。そんな夕食は、まず母の献立紹介から始まる。「今日のメニューは、親戚の人がつくってくれたお米、お味噌汁……。こら、きちんといただきますをしてから食べなさい。」

突然の怒鳴り声に驚いた。私は「いただきます」を言わないだけでなぜ大声を出されたのか、食材の生産者の苦労を知るまで、全く理解していなかった。

ある日、まだ小学生だった私は祖父の家を訪ねた。昼食の時間、いつものように親戚の作ったお米が出てきた。私はそのお米がどうやって作られているのかとても気になり祖父と一緒にお米を作っている農家の親戚の家へ行った。その家の近くには青々とした稲がおいしげっている水田と親戚の姿があった。親戚は熱心にお米のことについて語ってくれた。「米作りは、ただ田んぼに水を張って育てればいいと思っていないかい。でもそんなに簡単じゃないんだよ。土だって良くないといけないし、水の管理もきちんとしないといけないから、一筋縄ではいかないんだ。米作りは大変だけど食べてくれる人が笑顔になるのを見ると、とても嬉しくなる。それを楽しみに毎年苦労してお米を作っているんだよ。」

私はこの言葉を聞いてお米が食卓に当たり前のように並んでいるのは、苦労して作る誰かがいてくれるからなのだと改めて実感した。

その後、私は小学校の授業の一貫として稲作の体験をした。田植え、草むしり、収穫の三つの作業をするだけだったが、親戚の言っていたように一筋縄ではいかず、稲作の苦労を身にしみて体験することができた。そして初めて自分たちの手で作ったお米を口に運んだとき、一粒一粒に生徒たちの気持ちが込もっていることが分かるような気がし、いつもよりお米がおいしく感じた。

「いただきます」。この言葉には、食材の命をいただく、の他に、生産者の苦労に感謝するという意味が込もっていると思う。実際に体験した米作りや親戚の言葉から、私はそう感じる。きちんと「いただきます」の意味と生産者の苦労を知れば自ずと「いただきます」を口にするようになるのではないかと感じる。

今、私はご飯の有難みを考えることができるようになり、一人で食事を取るときでも絶対に「いただきます」と「ごちそうさまでした」を欠かさないようにしている。そうするだけで、ご飯が格段においしくなった。残してしまうことがあったものも食材の生産者の苦労がつまっている。そう考えると箸が進み完食できるようになった。

夜の七時三十分。いつも通り楽しみにしている時間がくる。しかし、以前の夕食の時間よりもご飯に関する会話が弾み、さらに賑やかな雰囲気になった。それは、きっと「いただきます」と「ごちそうさまでした」の意味を家族全員が理解しているからだと思う。

ファーストフード店などへ出かけると、無言で食べ始める人、無言で店を出ていく人を見かける。私はそんな人を見る度、怒りや悲しみを覚える。食材、生産者に感謝していれば「いただきます」の一言が自然と出てくるのは当然だ。

ご飯が手軽で簡単に食べることができるようになった今。しかし、誰かが苦労をかけてそれを作っているということ、命をいただいていることは、絶対に忘れてはならないと思う。